写真1 左は Ben Williams 前会長（ジュネーブ大会長）。

IHEA

ジュネーブ会議 フォトレポート

三 輪 卓 爾

1. はじめに

国際健診学会 (IHEA) で我が国が主役と呼べる立場になってから久しい。ことに今回 1992 年 9 月 3 日からジュネーブで開催された会議では、前年の秋に次回の 94 年の国際会議が東京で開かれることが、すでに正式に決定していただけたに、その前哨戦的な意味を含めて、日本は参加者数の上でも演題数の上でも、それに相応した態勢を確保する必要があった。

早めに日本総合健診医学会会員や過去の IHEA 参加者に呼びかけて、その準備を進めていたところに降って湧いたのが、92 年度の間人ドック学会が全く同じ期間に高知市で開催されるという決定であった。ジュネーブは前 2 回のハワイやサンジェゴと比較すると格段に遠隔地だということもあって、これは文字どおりショックというに値する大痛棒だった。

その後の一時期は手分けして各方面に電話攻勢をかけるなど、たいへんだったが、熊本日赤から 10 名、民間施設でも東京の芙蓉クリニックから 6 名といった具合で、運営サイドの英断に支えられ

た大量参加もあって、結局最後にはどうにか前回のサンジェゴをしのぐ勢いにまで達し、演題も 19 題に上って、面目を保つことができた。

旅行社の選択につづいて頭を悩ませたのは同時通訳者の確保で、これには長い日時と通信の往復、それに多額の経費を要したが、結果としては後で触れる機会もあるだろうが、上々と言ってよい出来だった。

最後まで苦労の多かったのは、提出論文の処理で、特にウィリアムズ会長からの最終論文のフォーマット指定が二転三転する中を、提出者全員がよくこれに対処していただいたと思う。主として渉外の任に当たったものとしては、この場をお借

写真2 第3地域田村政紀理事（94年東京大会大会長）夫妻

IHEA Geneva Conference, 1992: A Photoreport

国際委員, IHEA 第3地域会長

Takuji Miwa

写真3 中央右より日野原重明 IHEA 会長, 英国 BUPA の Last 女史, 役員指名会議議長 (またニューズレター編集者) の Oldfield 氏

りして、日野原会長はじめ IHEA および国内学会の理事各位、また演題提出者をはじめ参加者各位に敬意と謝意を述べさせていただきたい。

以下は不完全な手もとのメモにもとづいてほぼ日録ふうに綴ったレポートであるが、疎漏もあるかと思う。写真が参加者全員のものでない点を含めて、あらかじめお許しを願いたいと思う。

2. 9月2日 (水曜日)

この日は学会前日であるが、私は早めに来てほしいという本部からの要請もあって、1日早く9月1日の昼ごろに会場のホテルに来ていた。

ジュネーブ空港からほど遠からぬこの Holiday in Crown Plaza はなかなか良いホテルだったが、間もなくこのホテルのフロントが全くいい加減だということが判明した。すでに到着しているはずの連中のことを、皆まだ来ていない、と言い張って聞かないのだった。この印象は最後まで同じで、人を探す場合の頼りにはならずじまだった。

しかし、やがて予想した米国の連中とは、ロビーで次々に顔を合わせた。1日の夕食は本部の面々と食堂で取った。個別にはもう話していたが、日本での人事についての打ち合わせの結果、ことに94年の大会長の決定を含めて、しっかり伝えて置く必要があり、打ち合わせ事項もいろいろあったので、これは申し分ない機会であった。

JTBのツアーに参加された方々は、2日午前やや遅れて到着した。私は前日から単独でジュネー

ブに着いているはずの同時通訳の秋田さんを探していたのだが、やっと会えた。先方でも当方を探していたのだが、ここのデタラメなフロントのせいで、お互いに擦れ違っていたのである。ごく一部だが、どうにも読めない論文に彼女は手を焼いて、救いを求めているのである。この処理には、タツプリ1時間半を要した。

午後から、実際の会場状況に即して指揮系統や個々の係の実務の確認が行われていたが、その様子は見ていて、欧米の学会の舞台裏を知る上でよい参考になった。

それが終わって、一部の米国本部関係者とジュネーブ市内を、英国公園を中心に短時間散策した。その際、デジタル時計の電池を空港の店で交換できたのは助かった。

帰って来て早速日本の理事と主に第3地域の人事について打ち合わせ、その上でオールドフィールドが議長の役員指名会議に出席した。その結果は引き続いて夕方6時半からの理事会で報告された。日野原重明先生が IHEA の会長に再任を受諾され、私ももう1期第3地域の会長を引き受けることになった。日野原茂雄博士も IHEA 総務に留任され、ほかに稲田紘博士と小山和作博士が第3地域からの IHEA 理事に新任された。すでに国内で決定していた田村政紀理事の94年の大会長就任も正式に発表された。

一方で前から予備プログラムにもあったとおり、ポスター・セッションの提出者は、夕方6時

写真4 左から Timken 総務担当副会長, スウェーデンの Paul Hall 理事, Sherry Penicook 夫人, 米国の Morris Collen 理事

から会場にポスターを貼ることが決まっていたが、これに間に合わぬ演題提出者が一部に残ったのだけが心残りであった。

3. 9月3日(木曜日)

いよいよ学会第1日である。朝早く、7時からポスター・セッションで開始した。ただし、予定と異なって、ポスターを見せながら説明のあと質疑を受けるという小規模な口演と同じ形式に変更されたので、少なからず心配したが、日本からの出題者の多くが立派にこれに対応したのは素晴らしい。

英語原稿と日本語原稿の両方を手もとに完備させて置く必要を、かねてから口を酸っぱくさせて強調していたのも、この変更に際して役に立っていると嬉しかった。ここで最初に話したのは、東京警察病院の清水敏朗氏と、芙蓉クリニックの渡辺かほる氏だった。

ウィリアムズ大会長、ラスト女史らの開会と歓迎の辞に続いて8時半から開始されたオラルのセッションでは、第2席に東海大学の日野原茂雄氏が日本からの演題の皮切りを務めた。

正午からの昼食時には英国オックスフォード大学のヴェッセイ博士が、「経口避妊薬の得失」と題する特別講演を行った。

そのあと再開されたオラル・セッションでは、静岡健康管理センターの加瀬澤信彦氏と、ついで大手前病院の木村頼子氏、また PL 東京健康管理

センターの関口隆三氏が発表した。あとの2人の演題はどちらも肝腫瘍の画像診断についてのものだった。また、午後のオラルの第1席は香川医大の石川澄氏の発表であった。

盛りだくさんな1日のあと、6時半からレセプションとしてワインとチーズのパーティが設けられた。本稿に挿入した写真のほとんどは、このとき生まれて初めて買って持って行っていた使い捨てのパノラマ判のカメラで撮影したものである(ただし、このパーティには、肝腎のベン・ウィリアムズ会長と田村紀政理事ご夫妻が出ておられなかったもので、別のソースから補充したことをお断わりしておく)。なお、これと平行して希望する出席者との学問上の交歓の時間も用意されていたが、そのあとは改めて思い思いに夕食をとる向きもあり、1日が終わった。

初日を終わって、何より日本からの演題の首尾が上々で、また準備にことのほか苦労した同時通訳もさすがにプロと思わせる出来栄で、満足感を覚えた。

4. 9月4日(金曜日)

このころになると、会場になったホリデイ・イン・クラウン・プラザというホテルの食事が、前回ラ・ホーヤのホテルのそれと比べると、かなり変化もあって満足すべきものだとの印象が、だいたいにおいて定着した感じになっていた。

2日目の朝階下の食堂に行ってみると、型のこ

写真5 左端は日野原重雄 IHEA 総務, その右は J. Langworthy 氏, 右端は米国の Lew Malter 理事

とき洋食メニューに加えて、味噌汁が用意されているのに一驚した。なかなかの味であったが、惜しむらくは身のない坊主汁だったので、野菜など加えるとさらに美味であろう、と従業員に述べたところ、お代りに行ってみると、今度は野菜のほかにワカメまで加わっていた。本部のティムケン氏あたりの入れ知恵だったかと思うが、この味噌汁の底からキクラゲが出てきたのには2度ビックリであった。

この日も朝7時からポスター・セッションで、日本からはライフ・プランニング・センターの甲斐なる美氏、香川医大の阪本整司氏が発表された。

オラル・セッションは8時40分から行われ、筆者はここで発表したが、同セッションでは熊本日赤の小柳敦子氏も発表された。

小休憩のあと、続いて昼前までのセッションで、住友生命新大阪の玉井正彦氏が発表をされた。この日、正午からの昼食をとりながらのパネル・セッションは、オールドフィールドが座長になって、「自動化健診には何が起こったのか——22年間の回顧」と題するもので、草創期にかかわった人たちを中心にして語られたが、日本からは日野原重明会長が参加された。

続いてのオラル・セッションでは上尾中央総合病院の石塚毅彦氏が、また夕方近くには国立循環器病センターの稲田紘氏が発表された。

この長いセッションが終わってから、IHEA メンバーシップ・ミーティングが開かれた。日本の

学会の総会に相当するものである。ここで今回の IHEA 大会が日本で開催されることも広く会員に発表され、また今後94年までの新役員の顔触れも公にされたわけである。

この日も長い1日で、そのあと外国の人たちはオプションの見学などに出掛けたようである。前回のラ・ホーヤでは海上クルーズやメキシコ小旅行など日本からのメンバーも大勢参加する好企画があったが、今回はそれに匹敵するほどの魅力的な行く先も見当たらなかった。

幸いに空前の参加者が今回はジュネーブに来ていたのだが、もう一つ全員のまとまりを図る機会を持ちたいものだ、と他の理事の方々とも話していたが、この日、有志の方が懇親の会食を企画されて、日本でもよく知られているチーズ・フォンジュとはまた別の、シャブシャブ風のフォンジュを食べに、夕方から大勢で出掛けることができたのは、まことに嬉しかった。ワインもタップリ、肉も食べ切れないほどに出てきて一同堪能した。

ちなみに、このフォンジュの底からも、ホテルの味噌汁と同様に、私はキクラゲを発掘したのである。

5. 9月5日(土曜日)

シンポジウムの第3日は、朝7時から、例によってポスター・セッションで始まって、この日は前橋日赤の中村保子氏、芙蓉クリニックの柴田昌

写真6 左端はハワイのGibler 理事, 同夫人, 米国 Schmidt 理事, 1 人おいてイスラエルの Leshem 理事

氏, 熊本高野病院の藤好建史氏が発表された。

この日の特別行事は, 米国の一方の長老で長く IHEA にかかわってきた G. Z. Williams 氏を記念するシンポジウムで, 午前中いっぱいこれがこれに充てられた。同氏は前々回のハワイまでは出ておられたが, 前回のラ・ホーヤでは姿を見せず, 淋しく思って聞いてみたら, その時は北の海にクルーズに出掛けているということだった。

この瘦軀白髭の研究者は, 以前日本での国際会議の懇親会で, 日本側(多分藤間先生)が余興に郷土の太鼓を披露したあと, 即興に壇上に上がって見事なドラムをたたいて聞かせた記憶があるほか, ハワイの会場ホテルでは食堂で独り自分で寿司作りに励んでいた姿も忘れがたい。「ヤー, お寿司の手作りですか」と声をかけたら, 「ハイ, うちではドーモ家内が寿司が好きでなくてねエ」と言う返事だった。私事を言わせて頂くと, ハワイのときも私の発表に関心を寄せて後でいろいろ質問してくれたものだった。この記念シンポジウムでは日本からは慶応義塾大学の吉田勝美氏が発表された。

このシンポジウムのあとの昼食では, 国際医療情報学会(IMIA)の次期会長である M. J. Ball 女史が講演したあと, 功労者の表彰が行われた。

多年 Executive Vice President (総務担当副会長, 端的に言えば事務局長というところか) に任じた H. A. Timken 氏らがそれを受けたが, 異色は Ben T. Williams 会長の秘書である Sherry

Penicook 夫人だった。彼女は今年はじめに自宅が類焼のうき目に会って, まだ落ち着き先が決まらず, 転々としているという話をジュネーブに来てからご本人に聞いたが, 完全主義者のベン会長のもとで, よくあれだけの激務を黙ってこなしたものと感銘を受けた。ご主人はこの学会ではスライドの交換係など, もっぱら縁の下の力持ちに任じておられたが, 底抜けに明るい人であった。

以上でこのプログラムのギッシリつまったジュネーブ会議は終了して, 最後の議程として新役員による理事会が, 新 IHEA 会長である日野原重明先生を議長として開催された。ここではまずティムケン氏からジュネーブ会議の会計報告が行われたのち, 今回の会議で正式に決定した日本での次回国際会議の大会長である田村政紀理事から周到な予定表が配布され, それらを基本にして, 大まかな準備日程が議定され, またプログラム委員長(三輪卓爾)・組織委員長(日野原茂雄氏)ほか各 Region からの委員の顔触れもほぼ決まった。議事の終了とともに(あるいはそれより早いくらいに)世界中から集まった理事たちの姿があつという間もなく会場から消えたのは, この3日間の超過密スケジュールの会議を思えば, 無理のないことだったと言うほかないであろう。

さすがに私も疲れ切っていたが, この夜, 熊本の藤好氏の部屋で有志が集まるという情報が入ってきたので, 行ってみると, 日野原重明会長のお顔も見え, なかなか盛大な状況であった。若手の

写真7 左端 稲田紘理事, 右から3人目 G. Z. Williams 氏, 右端 英国 BUPA の Robinson 氏

写真8

顔触れも多く、つい時を過ごし、いつの間にか最後まで残って部屋に帰ったのは1時を回っていた。しかし、これはいろいろと有益な会合であった。

6. 9月6日(日曜日)

日本からの参加者は多くがこの日、JTBの企画のモンブランに出掛けて行った。本来は私も参加するつもりだったが、以前に1点の雲もないマッターホルンに行っていたし、今回はジュネーブの町にほとんど出ずにいたので、この日は骨休めかたがた町を散策して過ごした。前日、同時通訳の秋田さんに「日曜なんてジュネーブはゴーストタウンですよ」と脅かされていたが、空港の店は全部開いていた。格別土産物を仕入れるほどの予定はなかったが、やはりホッとしたのは事実だった。

ジュネーブの街はIHEAの会議がストックホルムであったあとで寄って以来13年ぶりだったが、湖の大噴水も見はるかすアルプスの山なみも

同じながら、目抜き通りにマクドナルドが幅を利かせているあたりがご時勢の移り変わりを物語っていた。昔、ご婦人たちの探していた手作り刺しゅうのハンカチの店を見付けて上げて、われ人ともに重宝した記憶のある店を探そうと試みたが、これは成功しなかった。

ホテルに戻って外国の理事たちに電話してみたら、みんな留守で、オールドフィールドだけが捕まった。何をしているかと聞くと、理事会の議事録を作るのだと言うので、国内学会の理事会が間近いのでそれに間に合わせてくれるように頼んで電話を切った。彼はジュネーブには単身で来ていたが、東京には昔IHEAの理事やニューズレターの編集をやったりしていた奥さんといっしょに行くと言っていた。

もう国内では、94年の東京での会議に向けての準備が始動している。このフォトレポートにつき合っていたいただいた読者の方々にも、いまからの心づもりをお願いして、筆をおきたいと思う。